

東亜同文書院研究をめぐって

復旦大学歴史系教授、上海研究センター主任

黄 美真

司会 本学東亜同文書院大学記念センターおよび中国学术交流委員会の共催で、復旦大学歴史学部の教授であり、かつ上海研究センター主任である黄美真先生にわざわざお越し願って、東亜同文書院研究をめぐってという題で、座談会形式でお話しただくことになりました。通訳は愛知大学に研修でいらつしやっている南開大学の張秀華先生。なお、黄先生を東道された霞山会理事であり、日大教授の江頭数馬先生からひと言、黄先生のご紹介を兼ねてお話しをお願いします。霞山会では同文書院史の続編を計画中で、ご存じのとおり、霞山会は東亜同文会の継承団体でありまして、そちらの方の内容、特に今回黄先生に来ていただいたいきさつなどをお話し願いたいと思います。最初に、江頭先生よりお話しをお願いします。

江頭 それでは、黄美真先生の紹介、それから本日ここに來たいきさつについて簡単に申しあげたいと思います。

まず黄美真先生ですが、一九三一年、福建省の泉州の生まれで、復旦大学をご卒業なさったのが一九五七年。それ

で、母校ですつと歴史系の先生として今日まで研究を続けられたわけですが、歴史系主任、歴史学部長をおやりになり、全国中国現代史研究会の副会長の要職を兼ねております。また上海研究センターの主任でもあるわけですが、今年の八月上海郊外の嘉定県で、上海開港百五十周年記念の学術討論会が開かれた際には、ほとんどその中心的な役割を主催者としてされ、かつ報告もなされたわけがあります。

そういった点からいえば、まさしく、解放中国というよりも、解放上海の最前線にあつて、歴史研究並びに、市の計画についても参加されている、第一線の学者だというようにみているわけでございます。

研究方面についてはいいますと、抗日戦争時代の研究をはじめ、最近では全く未開拓の分野だと思つていのですが、汪精衛政権の研究について、たくさんの資料を集め、研究報告をされておられます。で、私が黄先生と面識を得たのは、そう長いことございませんで、九十一年の十一

月、慶応大学地域研究センターにおみえになった時に、初めてお会いしたということでございます。

私は、さきほどご紹介にありましたように、霞山会の理事をやっております、どうしても伝統である東亜同文会の事業等々について、考えていかねばならぬという考えを持っておりまして、この事業を考える際に何よりも中国の研究者が、どういうふうにおやりになったかという点について、非常に関心を持っていたわけでありまして。

同文会が経営したのが同文書院大学で、上海の郊外にございまして、もちろんそれに対する中国側の評価がどうかというものがこういうことに関係してくるわけでございまして。実は、戦後五十年近くたつて、こういう問題について、今まで研究なり、あるいは調査なり、あるいは中国側研究者の意見を見たり、研究したのも、あげてみたらなかった。それで三年前ですか、黄先生に今の問題について率直におたずねしたところ、しばらくたつてから、ひとつ上海に残された東亜同文書院の資料なのですが、これについて調べてみよう、それからまた、若手研究者とも相談してみようという返事をいただいた。

同文会、同文書院関係の資料ということになりますと、もう日本で所蔵されているのは、愛知大学以外にはない。他に多少、外交資料館、東洋文庫などにもありますけれども、これはやはり一番まとまっているのは、愛知大学の霞山文庫である。そして何回か、黄先生と手紙をやりとりしたり、あるいは私も二回ばかり参りまして相談した結果、やはり上海に残された資料について収集するには、問題ある資料について照合することが不可欠であるということに

なります。せっかくおいで願うからには、上海の開港百五十周年記念学会で報告されておられる、先生の最も力を注いでいらっしゃる汪政権についても、お話し願うということにしてきたわけでございますが、まさしく先生の今日の目的は、愛知大学の本にあるわけでございまして、ようやくそれが実現したということでありまして。

同文書院関係資料の収集というのは、いったん分散したものをもう一回集めてみるということでありまして、目的はやはり、その資料を通じて将来の中国研究に資するということにあるわけだし、そういうことを通じてですね、かつての同文会、同文書院のいろんな事業を歴史の中に、客観的な評価の場を与えるということがあると思うわけであります。そういうことで私は私なりに考えてきたんですが、いざ、黄先生がおみえになって、その後の上海にある同文書院資料の収集をすすめられてきたのをお聞きするところ、やはり、そう簡単じゃあない、ということが分かった。それについて先生からお話しがあると思うんですが、ただいま図書館に行つてまいりまして、非常に短時間でしたんですが、そういう方面の資料を見たわけです。そして多少お話しを聞いたんですが、中国の大学、復旦大学でいいと思うんですが、復旦大学の歴史系に関する図書の中ですね、「支那省別全誌」のようなものはない。初めてここでみた。同文書院学生の調査旅行報告書も、見たことはないというようなお話しでした。それで私はつくづく、この五十年間の両者の断絶といえますか、あるいは研究者同士の溝といえますか、これは大きなものと痛感したわけでございます。

私も大学人でございますので、何か霞山会の事業に引張り込むためにというよりも、むしろ広くですね、日中の研究者の共同の研究の土俵づくりといったものが、どこからみつけたらいいのかということ、深く考えまして、その点ですね、この遺産について黄先生との具体的な意見交換などを通じてですね、将来に向けて開かれるというようなことを、本当は考えてるわけでございます。

その点から申しあげれば、愛知大学の先生方もこれにご理解、ご協力をいただければ、私にとっては大変励みになるというふうにいるわけでありませう。だいぶんお連れした人間が余計なことを喋っていると時間が無くなりませう。これから黄先生にお話し願うのですが、何も資料だけに限らず、広くお話しただければいいと思ひます。どうぞよろしく願ひいたします。

司会 それでは、黄先生にお話しを伺います。黄先生、どうぞよろしく。

黄 　ご在席の皆様、今度私としては三回目のお来日ですが、愛知大学は今回が初めてです。愛知大学は私の学校とは協定校です。愛知大学を訪問することは、長期間にわたって長年の願望でありました。今日私の願ひはついにかないましたので、心から嬉しく思っております。

今度私は、霞山会のお招きをいただいて参りました。特に東亜同文書院の資料について調査、研究に参りました。愛知大学と東亜同文書院とは、密接な関係を持っています。東亜同文書院の多くの資料が、戦後、愛知大学図書館に保存されています。私は学者として、東亜同文書院の研究にとりかかるのは、非常に有意義だと思っております。東亜同



大調査旅行報告会／同文書院26期卒業アルバムより

文書院の資料が中国に存在する状況について、次にご紹介いたします。私の研究はまだまだ不十分で、これにとりかかったばかりなので、よろしく願います。次にいくつかの方面を合わせて、その紹介をいたします。

最初の問題は、東亜同文書院に關連する現存の資料の調査についてご紹介いたします。私が知っているところによりますと、東亜同文書の、中国所蔵の資料は二つの特徴を持っています。一番目の特徴は、第一次資料が少ないという点であり、二番目の特徴は、各地に散在しているという点です。

私の調査によりますと、中国、主に上海、北京、南京などの地区で保存されている東亜同文書院の資料は次のとおりです。一番目は、同文書院に關する歴史文獻であります。その中には、東亜同文書院創立当初に關わりのある文獻、それから会員の名簿、出資者の名簿、経費を記した明細書、および財務報告書などです。

二番目は、東亜同文書の出版物です。その中には、また同文書院自身によって出版された出版物、その中には「同文瀕報」とか、それから「東亜同文書報告」などがあげられます。私は、霞山会によって出版された「東亜同文書主要刊行物機関誌総目次」と照らし合わせてみれば、補うことができると思います。たとえば「東亜同文書報告」の第一期から第九期分です。

三番目は、同文書院指導者の往復書簡。中国に現存されている同文書院指導者の、例えば近衛篤篤などが中国の高級官僚の李鴻章、劉坤一、盛宣懷へ与えた若干の往復書簡などです。

これから紹介いたしますのは、東亜同文書院の歴史档案、歴史文書といふべきものです。まず、東亜同文書院の接収された資産の資料についてご紹介いたします。中国の大陸で保存されている若干の東亜同文書院の歴史档案の中では、東亜同文書院の接収資産目録が一番完全なものです。それは、主に一九四六年、国民政府教育部京滬特派員事務所によって、接収された同文書院の資産の目録だからです。

これは、東亜同文書院の最終段階の發展の規模、資産の状況、財産の移動などについて知ることができる価値のあるものだと思います。次は、東亜同文書院の校務資料についてです。東亜同文書院の校務資料の中に、若干の卒業記念アルバム、学校紹介、学園生活の写真集などがあげられますが、内容がごく少なくて、ほとんど第一次資料は見つけられません。教師、学生の名簿、それから時間割、カリキュラムはありませんでした。その次は、東亜同文書院の図書資料の行方についてお話しします。

東亜同文書院は存在した期間、一貫して関係資料の収集にとても力を入れていました。ですから、そのコレクションは非常に特徴を持っています。例えば、中国の地方誌、中国の植物標本、動物標本など、そのコレクションは完備していたと思います。私の調査によりますと、このうち図書資料は、もう散失したと断定できます。完備していたこれらの資料の中で、次の点に気が付きました。一九四六年以後、大部分の資料が南京の中央図書館に移転しなかったんですが、内戦などの理由で上海から運ばませんでした。その当時は、南京は国民政府の所在地ですから、南京に移したかったんです。しかし、上海から運ばませんでした。従

つて、一九四九年まで、東亜同文書院の図書資料は依然として上海に保存されていたと断定できます。この資料の一部分は、中央図書館の上海出版品国際交換処というところの倉庫に保存されたと思います。残りの一部分は、上海交通大学に保存されていました。しかし、一九四九年以後は、図書資料も何回かの移転によって大部分が散失してしまいました。

しかし、それらの資料も調べようはありません。私達はすでに上海図書館で東亜同文書院図書館の蔵書目録、その他若干の資料を見つけました。他にも、上海市の档案館でいくつかの同文書院の卒業記念アルバム、学校紹介、学園生活の写真などが見つかりました。ですから、これらのいくつかの場所ではばらばらに同文書院の資料が保存されていると考えられます。

その次は、東亜同文書院研究についての文献資料などです。第一に新聞、雑誌などの資料についてご紹介いたします。東亜同文書院が、中国の新聞雑誌などで取り上げられたのはそれほど多くない。上海地方で出版された新聞、口カルの新聞紙には、若干断続的な紹介があります。例えば、東亜同文書院の始業式、それから夏期の大旅行、創設四十周年記念、それから学校の改組などについても、報道されました。第二、回想録と研究論文についてご紹介いたします。東亜同文書院に関する回想録、研究の専著はいずれも大変少ない。分かっているところでは、専門的論述が東亜同文書院についての論述は非常に少ないです。上海で出版された「上海文史資料選輯」及び台湾で出版された「中華民國開國五十周年記念文獻」などがあげられます。第

三、訳書について。一九五九年、北京商務印書館によって、翻訳、出版された東亜同文会編の「対支回想録」。これが唯一のものといっていると思いますが、中国の学術界に東亜同文会が近代中日関係に与えた影響について理解を与えました。

私はこの際、ぜひ今後の研究についての提言を行いたいと思います。その第一、東亜同文会、東亜同文書院と近代中日関係の関わりについて。この課題は、若干の特定テーマをもちます。例えば、下関条約と東亜同文会の創立、東亜同文書院と近代中日留学教育、東亜同文書院と近代日本における中国研究、東亜同文書院と近代中日外交関係、東亜同文書院と近代中日経済関係などで、みな研究の価値があると思います。

第二は、東亜同文書院の上海研究について。東亜同文書院はかつて中国の多くの場所で詳しい社会調査を行ない、数多くの調査報告と研究論文を残しております。これらの文献は、ほとんど東亜同文書院発行の刊行物に発表されました。今なお、これを利用できる人は少ないですから、できたらその中で価値のあるものを改めて整理して発表することは、研究上の価値があると思います。けれども、その分量が多すぎるので、上海をテーマとするものに集中したほうがいいと思います。

第三は、中国の新聞雑誌などで、東亜同文書院の紹介された記事を集めることです。これらの新聞は、「申報」、「新報」、「時報」など、清末から民国期に上海で出版された主な新聞があげられます。

第四は、中国在住の東亜同文書院卒で、まだ健在されて

いる同窓生、これらの人を集めて回想録を書いていただくことです。

第五は、一九四六年、国民党教育部京滬特派員事務所が、東亜同文書院の接収を行ないましたが、中国第二歴史档案馆及び上海市档案馆などを調査したところでは、この組織についての一次資料を見つけないことができませんでした。私が推測したところでは、これらの資料はやはり中国大陸に保存されていると思います。台湾省に保存されている可能性はほとんどないと思います。特に江蘇省档案馆か、南京市档案馆に保存されている可能性は多いにあると思いますが、まだ調べておりません。

第六は、愛知大学の保存する東亜同文書院の調査資料の整理についてです。私の知るところでは、東亜同文書院大旅行によって作成された調査資料の大部分が愛知大学に保存されています。けれども、長期間、大規模で完全な整理がなされてきませんでした。これらの第一次資料を整理して、特定テーマ別に資料を編集して出版すれば、非常に学術的価値があると思います。

私個人の考え方では、これらの資料は、今世紀前半の四十年間、日本の中国研究の重要な成果であると考えます。今まで満鉄調査部によって調査された資料が多くありますが、すでに国際的に学者達から注目されています。また、これらの資料によって研究がなされており、同文書院の学生が行なった夏期大旅行によって収集された膨大な中国社会についての資料は、中国近代の歴史を研究する上にとっても価値がありますけれども、まだ整理出版されていない、だから利用する学者もほとんどいないのです。学生達

のそれらの調査報告は、数から見ても、質から見ても、満鉄調査部の資料より劣っていないと思います。以上は、東亜同文書院、東亜同文会の研究に対する提案です。今日は座談会ということですから、以上の発言を行ないました。皆さんどうもありがとうございました。

司会 黄先生、ありがとうございます。若干質問の時間を予定しておりますので、ご参加くださった方々からご意見、質問を受けつけたいと思います。細かな専門的な問題はあとまた時間がとれると思いますから、最初に一般的な問題についてどうぞ。まず最初に、これが本日の主要なテーマでありましたが、東亜同文書院をめぐる問題。こちらから質問、ご意見があります方は、どうぞご自由に。

参加者 それでは、東亜同文書院卒業の山田兄弟についてご存知でしょうか。山田良政、純三郎の二人です。

黄 今日、資料を見せていただきました。

参加者 山田さんは、一九三十年頃に上海で「江南晩報」という新聞を出していたんです。それは上海に残っているんでしょうか。

黄 その具体的な様子ははつきり覚えておりませんが、もし三十年代、上海で新聞社を営んでいたのなら、上海で見つけることができるはずだと思います。ただ、完全な状態で保存されているかどうかは分かりません。

参加者 上海では、新聞類はどこにあるんですか。あんまり図書館にはないようなんですけど。

黄 新聞類は上海図書館本館、分館が徐家匯蔵書楼といいますが、ここにあります。解放前はフランスのミッシェンスクールの図書館だったところです。現在、大量の近代

以来の中国の新聞雑誌が保存されています。種類も揃っています。

参加者 目録はありますか。

黄 中国の新聞類の目録はあります。欧文新聞はないと思うが、はっきりは知りません。

参加者 ついでだから聞きますけど、新聞図書館というのが昔あったという記事があったんですが、そういうのがどこかにありましたか。

黄 そういえば、上海図書館で保存されていた欧文新聞類の目録が出たというニュースがありました。

参加者 「ノースチャイナヘラルド」というのがありますか。

黄 この新聞は「北華捷報」といって、中国で一番完璧に保存されている新聞です。あとで「字林西報」という名前に改められました。もとの共同租界で出されていました。参加者 先生のお話しによりますと、東亜同文会の創立をめぐって、近衛篤磨と李鴻章の往復書簡があるとおっしゃいました。これは、何通ぐらいありますか。

黄 李鴻章の伊藤博文への手紙、それから近衛氏の両江総督劉坤一への手紙、盛宣懷への手紙を見つけました。それ程多くないです。数通です。

参加者 私はこの時代の研究をしていないので、はっきりしたことは言えませんが、もしこれが日本に紹介されていらないとすると、これからぜひ先生ご自身で論文を発表していただきたい。

感想ですけれども、東亜同文会の成立を研究する場合です、これは中国で研究する場合も日本で研究する場合も、

日本でいう日清戦争のちよつと前ごろからですね、漢口楽善堂というのがあって、そこで軍も特務も中国のあちこちの調査をやった。それは、やはり軍関係の人がやるわけですから、もし中国と日本が全面戦争になってですね、中国を占領する。そういうような場合にあらかじめあちこちを調査してですね、そういう調査をかなりやっておつたと思うんですね。その頃は、貿易が中心の調査じゃなくて、経済という調査もあつたかもしれませんけれども、やっぱり軍事が中心だったということは、いざという時の調査ではなかつたかと思う。それが、楽善堂に関係していたような中の一部の方が、東亜同文会なり、東亜同文書院よりちよつと前、日清貿易研究所ですか、それは日清戦争以降で、むしろ帝政ロシアの満州進出とか、そういうような段階で日清貿易研究所ができ、更に、その少し後で東亜同文書院が成立しました。

その段階になると、そしてまた東亜同文書院ももちろんですけれども、そうやってきますとどっちかっていうと、日本と中国の経済的な提携といえますか、あるいは中国との貿易とかですね、日本の経済的な発展と、そういうことに主眼点があつた。そういう段階に東亜同文会ができた、日清貿易研究所ができた、更に、正式に東亜同文会、同文書院ができますけれども、東亜同文書院というものですね、そういう経済、貿易の分野で中国に活躍する日本人を育成するという学校の性格がある。

ただし、楽善堂の、軍の特務なんか調査をしていたような、詳しい調査というのは、伝統はですね、目的が違って来たと思うんですけども、そういう具体的な調査なんて

いう伝統は、まあ楽善堂の頃から引き継いでいるんじゃないか。そういうふうな見方で、研究するということに意義があるんじゃないかと思えます。

もう一つ、これも感想ですけども、東亜同文会というのは学校系としては東亜同文書院に一番重点があるんですけども、その他に天津に天津同文書院、あとで天津中日中学校とか、天津中日学院と名前が変わる。あるいは漢江に江漢中学、あるいは東京にも比較的短期間だろうと思えますけれども、東京同文書院。こういう天津とか漢口とか東京の、東京は短いでしょうけれども、主に中国の若い青年をですね、日本の学校、東亜同文会の系列の学校に入れて、教育するという。そういう課題もあつたらうということとして、そういうものですね、あるいはどういう人が、中国のどういう方がそういうところへ入ってきたか。あるいはまあその後どういう活躍をしているか。そういうものも研究のテーマになりうるんじゃないかというのが、私の感想です。

黄 今日このテーマは上海ですね。そういうことで上海の研究ということですから、私のはちょっと範囲が広がってます、東亜同文会と、だから違いますけれども。

参加者 同文会の教育事業、上海の同文書院の経過からいって、東京の同文書院というのは同文会として、中国からの留学生教育をやったんです。そういう点からいえば、セントジョーンズと同文書院をただ比較するだけではね、もったいないと思います。

先生がおっしゃった上海にあつたミッションスクールについて、ちょっとお教えください。

黄 近代以来、上海にはいくつかの外国人経営の大学がありました。アメリカのセントジョーンズ大学、滬江大学、フランスの震旦大学、それから日本の東亜同文書院大学がありました。なかでも、同文書院は特徴がある。外国の大学は中国人を入学させて教育したが、同文書院は日本人学生を教育した。ただ、短期間ごく少数の中国人学生が入学しただけでありませう。この点、他の大学と全く異なる点に研究する価値があると思えます。

司会 まだ、いろいろあると思えますけれども、予定の時間がきました。このあとにも若干質問があるので、少し専門的なお話してございますので、一応これで座談会は終わらせていただきます。黄先生、長時間ありがとうございました。以上で座談会を終わります。どうも本日はありがとうございました。

これは一九九三年十一月二十九日、愛知大学記念館第二会議室で行なわれた東亜同文書院をめぐってと題する黄美真教授の講演内容である。なお、当日、別に汪精衛政権についても論及されたが、この分は割愛した。

(文責編集部)